

〔 編 集 後 記 〕

2013年の暮れ、遺伝子診断、遺伝医療に関わるものにとってきわめて重大なニュースが立て続けに2つ米国からもたらされました。2003年に終了したヒトゲノム計画では13年の歳月と約3,000億円の費用を投じてヒトの全ゲノムがほぼ解読されましたが、その後の技術革新は目覚ましく、最新の次世代シーケンサーでは約1,000ドル、ほぼ1日で解読が可能な時代に向いつつあります。

1つ目のニュースは次世代シーケンサーのリーディングカンパニーの1つであるIllumina社のMiSeqDxシステムが米国FDA（食品医薬品局）より体外診断用医療機器としての認可を受けという報道です。いよいよ次世代シーケンサーが実際の臨床の場で活用される時代の幕開けです。

2つ目は病気になりやすい体質を唾液中の細胞に含まれるDNAを用いて判定する遺伝子検査キットを販売する「23 and me」社に対して、「医療機器として未承認であり、違法である」として販売中止命令がやはりFDAより下されたというニュースです。

「23 and me」の遺伝子検査キットは認知症や2型糖尿病など遺伝子の関与はあるものの、一つの遺伝子の変化で規定されるのではなく未知のものも含めた多くの因子が関与し、また環境因子の関与も大きい疾患を扱うものです。したがって、遺伝子検査の結果解釈には十分な注意が必要です。これらのいわゆるDTC (direct to consumer) genetic testingへの国民の関心は高く、私が担当する千葉大学病院の遺伝子診療部でも医療機関を介さずにこれらの遺伝子検査を受けた一般の方々への対応に迫られています。

一方、次世代シーケンサーは亥鼻キャンパスにおいても大型機器が研究用として医学研究院に、コンパクトな機種が診療用として附属病院に

設置され、その技術をいかに有効かつ適切に臨床現場で活用するべきか、について全学的な議論が必要な状況になっています。

千葉医学雑誌はこのような最新情報の重要な媒体であり続けていますが、今回お届けする第90巻2号には総説と症例報告がそれぞれ2編、話題が1編、千葉医学会例会記録、Open Access Paper 1編が掲載されています。

神田達郎先生による慢性C型肝炎に対する新しい治療法に関する総説は本疾患に対する抗ウイルス療法の最新状況について、治療効果予測因子に関する知見も含めて解説されています。今後はインターフェロンなしに、経口剤のみで治療可能な時代が来るようです。清水 健先生による腸管出血性大腸菌に関する総説は病原細菌制御学講座の研究成果に加えて、Vero cell cytotoxin (VT) や Shiga-like toxin (SLT) に関する歴史的な経緯が詳細に記載されていて興味深く読ませていただきました。Vero細胞を樹立された安村美博先生のこととも紹介されていますが、我々学生から親しみを込めてヤスモネラ・ヒゲラと呼ばれていた先生の独特な語り口の講義が懐かしく想いだされます。山本悠司先生、間宮俊太先生、乗本将輝先生による3編の症例報告もいずれもとても興味深い内容です。話題「3人のトップランナーたち」は日本細菌学会浅川賞の受賞者として北里柴三郎先生の生誕日に特別記念講演を依頼された野田公俊教授による3人の偉人達にまつわるお話です。

なお本号には、本年7月23日に開催される千葉医学会の学術大会の予告が掲載されています。本年は救急医学講座の平澤博之名誉教授と織田成人教授が講演される予定です。詳細はあらためてご案内いたしますが、多くの方々のご出席をお待ちしています。

(編集委員 野村文夫)